

# 歳出しお宝ニュース

— 第 56 号 —

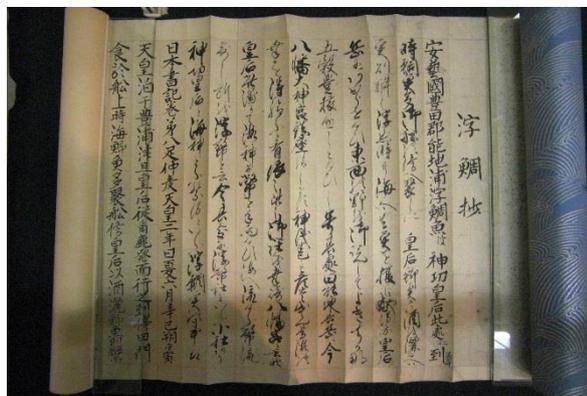
## えぶね 「幸崎能地の家船民俗展」開催中

現在、三原市歴史民俗資料館では、「幸崎能地の家船民俗展」を行なっています。

「家船」とは、船の上を生活の場として、寝食を行なっていた漁民たちの船です。彼らは、能地を本拠として、瀬戸内海の様々なところに向かい漁をしていました。今回の展示では、家船で使われていた漁具と民具、さらに能地で古くから行なわれていた「浮鯛漁」についての資料を取り上げています。



↑企画展の様子



↑展示中の「浮鯛抄」

家船で使われる漁具は、あまり大きなものではありません。家族四人ほどが、無理なく漁をすることの出来る網のサイズ、「手繰り網」を主に用いて漁をしていました。こうした漁具の多くは、シュロや麻で作られたものです。化学繊維で作られた網が登場する前は、漁師たちは漁具を手作りしていたそうです。

特に特徴的な漁具は、能地で行なわれていた「浮鯛漁」に使われていた、タマ（玉網）です。「浮鯛漁」とは、立春から数えて四十夜から八十八夜の間の、大潮の日前後に、鯛が能地沖の海面に浮かんできます。この浮かんできた鯛を網で掬って漁獲することです。この現象は、古くから知られており、「浮鯛抄」に記された伝説では、神功皇后が能地沖で酒を撒き、それに酔った鯛が浮かんできたとされています。「浮鯛抄」は、日本書紀にあった浮鯛の記述を基に江戸時代に書かれたものです。今回の展示では、この「浮鯛抄」の中でも、一番古い形式のものを展示しています。

家船の漁民の方々が使っていた民具も、陸のものとは比べて小さなものが多いです。船の上では、スペースが広く取れず、必要最小限の大きさにすることが重要だからです。しかし、そんな中でも、水を船に持ち込む

のに使った「ミンダル」は、比較的大きな物であり、船の上では水が貴重であったことが伺えます。

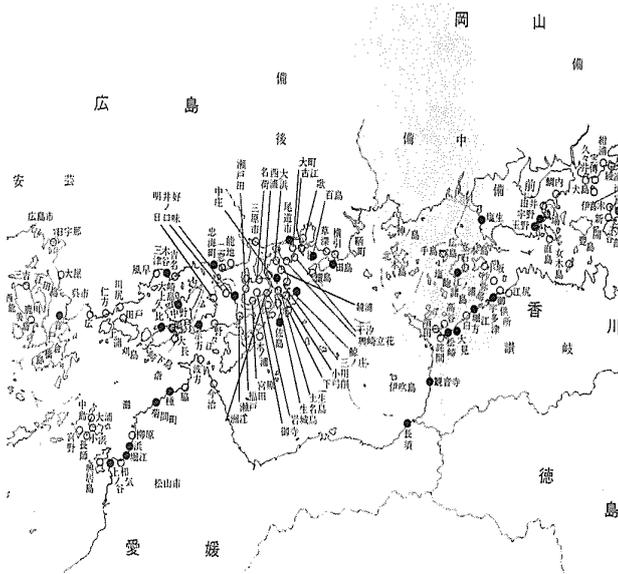
今回の企画展「幸崎能地の家船民俗展」は、3月31日まで開催しています。ぜひ、ご来館ください。

## 家船の枝村, その数 100 以上

家船に関する研究の要素として重要な、家船の漁民が瀬戸内海各地に築いた枝村について説明します。

図 1 は、能地と二窓を本拠としていた家船の漁民が築いた枝村、寄港地を示しています。その範囲は非常に広く、西は大分（豊後）から、東は香川（讃岐）まで、その数は 100 以上にも昇ります。

こうした枝村は、家船に暮らしていた人々の、水や薪などの補給拠点として築かれました。この枝村は、もともと人の暮らしている地域に多かったそうで、こうした人々に、漁獲した魚を売り歩くこともあったそうです。



また、村の人々とは漁獲物を売り歩く交易の関係だけでなく、遠方の漁の知識なども伝えて回り、瀬戸内海の島々の知恵をつなぐような役割も担っていました。家船の漁師たちが、瀬戸内海の島々で漁を行なっても咎められなかったのは、漁の手法を習おうという意図もあったからだそうです。

このように、瀬戸内海の漁に対して大きな貢献をした家船ですが、反面、能地にとっては、枝村の存在は時に良くないこともありました。それは、枝村への人口流出です。これに危機感を覚えたのが、能地の漁民の多くが檀那寺とした、善行寺でした。

善行寺は、これ以上の人口の流出を防ぐために、「宗旨宗門改人別帳」というものをつけました。これは、現在で言うところの戸籍に近いものであり、善行寺は、これに一年に一度の更新を義務付けることで、家船と能地の結びつきをより強いものにしました。特に、旧正月とお盆の時期にこれの更新が行われていたそうです。これは、現在の能地春祭りの旧称である、「船留祭」という名称からも読み取れます。この祭りは、かつては旧正月からまもなく行なわれていました。とは言っても、能地から枝村に移り住む人々が全くいなくなるわけではなかったようです。

枝村は、瀬戸内海の漁の発展に大きく寄与してきました。現在でも、枝村のあった場所は、漁港として残っている場所も多くあります。そうした土地で、家船漁民が広めた、「浮鯛抄」が見つかることもあり、能地と枝村の関係性の深さも伺うことができます。

↑ 能地、二窓移住寄留地図 (図 1)  
「家船民俗資料緊急調査報告書」から

### 資料館 収蔵資料紹介



- 〔名称〕 石鏃 (上二つ) 刃器 (下一つ)
- 〔時代〕 縄文時代晩期 (前 1000~500 年)
- 〔情報〕 出土場所 小坂町 貝持貝塚  
材質 安山岩 (石鏃)  
黒曜石 (刃器)
- 〔一言〕 三点とも、加工度の高い石器であり、観察すると加工面がよく分かります。

発行 平成 30 年 3 月 28 日

〒723-0015 三原市円一町二丁目 3 番 2 号

三原市歴史民俗資料館

TEL・FAX 0848-62-5595

※本冊子に掲載の写真などは、許可なく転用なされないようお願い申し上げます。